

■大馬も町を練り歩く

田主丸町の中心部を虫追いが練り歩くのは当時も現在も同じです。しかし、行列の構成、経路や合戦場所の違いがあります。

まず当時は大馬も担いで練り歩きました。練り歩く距離は約3・4km、さらに途中で合戦が複数回あります。

『農協田主丸』第54号に、35名で馬を担ぐ、とあります。当時の写真から実際に担ぐ際は20名強なので、ほぼ2交代で町内を回ったと思われる。現在の大馬は、トラックに載せられて合戦場所へ運ばれます。

大馬が進めば頭上の電線に引っかかることもあり。なので、長い竿で電線を押し上げる役がいました。長い笹の先に幟(のぼり)を垂らした旗持ち達も付き従いました。

行列の経路は、当時のコース図に従え

▼田主丸小学校(昭和52年) ⑱



ば、次のようになります。

行列はAコープ田主丸店を出ると豊城交差点を目指し、そこからは雲雀川沿いに田主丸町を抜け月読神社(三夜様「さんやさま」)まで東進します。途中、阿弥陀寺で1回目の合戦を行いました。

2回目の合戦は、現在も行う月読神社で。現在と違うのは、「人形裁判」として人形踊りを指導した年配の方が周りを囲み、踊りや合戦を監督しました。

人形裁判は全員、足元は地下足袋、背広の上着で袖に腕章を巻き、帽子に鉢巻きをしました。昔ながらの人形裁判の服装でした。

月読神社の合戦が済むと、再び雲雀川に沿って練り歩き、田主丸小学校で3回目の合戦を行いました。

行列は新町通りに入って西進し、道の突き当りに鎮座する祇園様(素盞鳴神社)に4回目の合戦を奉納しました。そして、当時賑わっていた田主丸中央商店街で踊りを披露、多くの商店から「お花」(御祝儀)をもらいました。

以上の順路ですが、清水さんの日記では、合戦は月読神社と田主丸小だけです。写真も阿弥陀寺と祇園様の合戦が残っていません。また、コース図は、手塚だけが豊城交差点から国道を吉田町まで進んで田主丸小に向かいます。これでは阿弥陀寺の合戦は難しくなりそうです。

いずれにしろ、合戦を披露して3・4kmを練り歩き、午後5時頃、田主丸町農協に戻って、夜に備え夕食を取りました。

▼田主丸町の中心部(昭和52年) ⑳㉑㉒



▼田主丸中央商店街(昭和52年) ㉓



■夜の合戦、川にあらす

13年振りに復活した虫追い祭も、夜の合戦を残すのみとなりました。会場は意外にも巨瀬川ではなく、町民グラウンドでした(現在の田主丸ソフトボール場)。

実は、パイオニアクラブの誰も、過去の虫追いが川合戦していたことを知らなかったそうです。大馬を知った8ミリフィルムの中でも川合戦を見た覚えはない、と当時パイオニア副会長だった今村重徳さんは語ります。パイオニア会長だった池尻和守さんも川合戦のことは当時知らなかった、と言います。

農協の田中嘉津美課長は、田主丸町中心部の虫追い経験者ですから当然、川合戦を知っていました。しかし、全くの初心者が川合戦するのは無理と判断し、川合戦のことは敢えて口にしなかったようです。

■町民グラウンドで夜の大決戦

この年の8月に完成したばかりの町民グラウンドには大観衆が集まりました。新聞では2000人、『農協田主丸』は5500人と伝えています。農協青壮年部竹野支部長だった清水良則さんは「観衆多く、皆張り切る」と日記に書き留めています。

夜7時、60本を超える松明(たいまつ)の火を先頭に、鐘太鼓が会場に入ってきました。写真には、観客の子ども達が松明を持っている姿があります。子どもが松明を持ち入場したのか、その辺りは不明です。

次に大馬の入場です。昼間の出陣式と同じように会場を1周したことでしよう。最後に10本の松明に先導されて手塚と実盛が姿を現しました。

決戦は5回繰り返されました。演技にも熱が入りました。熱が入りすぎて、強く鐘を叩いたら、突然鐘の音がおかしくなり、鐘が割れた、というエピソードまで残っています。お寺(おそらく伯東寺「はくとうじ」)から借りた鐘だったので弁償したものの結構高額だった、という後日談まで付いてきました。

最後は大馬に高山昌則組合長を乗せて会場を1周。午後8時過ぎに無事に終了しました。

終了後は、各支部に分かれて打上げをしました。農協課長だった田中嘉津美さんによると、この年は月読神社そばの料亭「まるよし」1階の大浴場を借り切って参加者に体を温めてもらったそうです。

以上、昭和52年の虫追い祭は大成功の内に幕を閉じたのでした。

▼町民グラウンド(4枚とも昭和52年) G,H,I,J



■第2回に向けて

虫追い祭の4日後の10月26日、青壮年部とパイオニアクラブ合同の虫追い祭反省会が田主丸町農協で開かれました。「会議では、次はどうやるかね、という空気になっていた」と当時パイオニア副会長の今村重徳さんは語ります。

開催時期は、高山組合長と田中課長の間で検討し「3年に1度が妥当」となりました。毎年開催する資金が用意できないからでした。

実際、この時に掛かった経費は、人形大馬の製作、140人分の衣装や昼食・夕食、指導者へのお礼、小屋入りや打上げなど、諸々で125万円程度になりました。

この金額に充てるため、農協予算、役場や町教育委員会の支援金、さらに祭り得た御祝儀まで使いました。

しかし、その後も虫追い祭を続けたのは、自分達だけでなく地元の人々にも大いに喜んでもらえたという強烈な達成感を得たからに他なりませんでした。

同時に、皆が意気投合して短期間で一大事を成し遂げた経験は、半世紀経った今も色あせない強いつながりを、農協の若手達にもたらしたのです。

